

1 作 物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 水稻極早生品種の穂肥</p>	<p>(今月の作業のポイント) 水稻極早生品種の穂肥 水稻の病害虫防除 水稻の水管理 大豆の播種 大豆の中耕・培土</p> <p>極早生品種の穂肥の施用時期は、早期栽培のあきたこまちは6月下旬、コシヒカリは7月上旬、短期栽培のあきたこまちは7月中下旬頃である。これらの品種は特に施肥に敏感なので、倒伏を防ぎ、高品質安定生産のために、穂肥の施用には細心の注意で時期や量を誤らないようにする。施肥量は10a 当たり成分量で早期栽培のコシヒカリは窒素は2～3kg、カリは3kgを、あきたこまちは窒素、カリとも3～4kgを基準とするが、登熟期間が高温期に当たるため、乳白や心白粒及び未熟粒の発生を防ぐため、穂肥は確実に施用する(基肥一発肥料を除く)。しかし、倒伏や食味低下を防ぐために、窒素肥料は過剰にならないように注意する。</p> <p>穂肥施用の目安は、コシヒカリでは出穂前18～16日(幼穂長が8～15mm)、あきたこまちでは出穂前20～18日(幼穂長が2～5mm)で、これより早く施用すると倒伏の危険性が高まる。幼穂長で穂肥の時期を予想する場合は、生育の中庸な株の中で最も長い茎をナイフで縦に切って幼穂の長さを測る。それを1圃場で3～5か所で調査して穂肥の時期を予測する。</p> <div data-bbox="491 1227 1331 1854"> </div> <p>写真1 出穂時期の予測 最長茎を元から切り取る(左上)、カッターナイフで茎を根元から縦に切る(右上)、幼穂の長さで出穂時期を推定(左下)、葉鞘のヨードデンプン反応(右下)</p>

項 目	作 業 内 容
(2) 水稻の病害虫防除	<p>ア 斑点米カメムシ類 コシヒカリ、あきたこまち等の極早生品種の等級格下げの大きな要因となっている斑点米カメムシ類の被害について、特に登熟期が高温・少雨時に被害が拡大するため、梅雨明け後は徹底した防除が必要である。</p> <p>耕種的防除として、カメムシ類の生息地になっている水田周辺の畦畔や休耕地等の雑草を水稻の出穂期の15日前までに刈り取っておくと被害が軽減出来る。また、出穂期前20日までと、出穂期直前に行う2回刈りでさらに効果が高い(滋賀県農総セ)。</p> <p>薬剤防除は、乳熟期～糊熟期にかけて水田33㎡(10坪)当たり2頭以上の発生が必要であり、1回目の防除から7～10日後に追加防除する。また、畦周りの被害が多いため、畦周りを重点的に防除すると効果が高い。7月は気温が高めとの予報から、発生や被害に助長的であり、さらに、近年の本県の発生・被害状況から早期水稻では1回目の薬剤防除は必須である。</p> <p>イ いもち病 今年はずでに県内の一部で苗いもちや葉いもちが確認されており、7月前半は平年並に曇りや雨の日が多く、気温も高めとの予報で、発生に助長的であり、さらに、7月はいもち病の発病適温(24～26)や、本病への感受性が高まる時期も重なるため、本病に弱い品種や常発地ではいもち病の発生が懸念されるので、次の点に注意して防除する。</p> <p>(ア) 田植え後の置き苗は、いもち病の伝染源になるので、地域ぐるみで早急に処分する。</p> <p>(イ) 圃場観察や発生予察情報などで本病の発生に注意し、病斑を確認したらフェリムゾン・フサライド等の治療効果の高い剤で防除する。</p> <p>(ウ) 早期栽培のコシヒカリ等では、穂ばらみ期に他の病害虫との同時防除を徹底し、その後雨が多いときは穂揃期にも追加防除する。</p> <p>(エ) いもち病は窒素過多条件で多発するので、過剰な窒素追肥は控える。</p>
(3) 水稻の水管理	<p>早期水稻では、最も水を必要とする幼穂形成期から出穂・開花期を迎えるため、やや深水に湛水し、土壌を乾燥させないようにする。</p> <p>特に出穂期後5～20日間において、日平均気温が26～27(日最低気温が24)を超えると乳白・未熟粒が発生しやすいので、この間はきめ細かな水管理が必要である。高温時に落水するとさらに品質低下を助長するので、決して落水しないようにする。</p> <p>普通期水稻では田植え後20～30日頃から、根の健全化をはかる目的でやや浅水に管理し、必要な茎数の7～8割が確保できたら過剰分げつの抑制、根の健全化促進、地耐力向上(土壌を固めて収穫作業に備える)の目的で中干しを行う。中干しの期間や程度は土壌条件で異なるが、一般的には7～10日間とし、強度な中干しはしない。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(4) 大豆の播種</p> <p>(5) 大豆の中耕・培土</p>	<p>大豆の播種については6月に詳細を記述したが、7月はフクユタカ、丹波黒等の播種時期であり、次の点に注意して播種作業を行う。</p> <p>ア 湿害対策 大豆は播種時の湿害が、その後の生育に大きく影響するため、暗きょや明きょ及び額縁明きょ等の排水対策を徹底する。</p> <p>イ 播種時の乾燥対策 梅雨明け後は、晴天で高温の日が続くことが多く、土壤の乾燥が著しい。大豆は播種後に土壤が乾燥し過ぎると出芽が悪くなる。大豆の播種深度は2～4cmとするが、土壤が乾燥している場合はやや深めに播種し、軽く鎮圧する。また、播種後に乾燥が続く場合は、動噴やスプリンクラー等で灌水する。</p> <p>大豆の不定根の発根促進、根粒菌の着生や活性の向上、排水対策、倒伏防止、乾土効果による地力窒素の発現、除草等を目的に中耕・培土を行う。</p> <p>1回目は本葉第2～3葉の展開期に子葉節が隠れる程度に中耕・培土するが、排水不良田では早めに(1～2葉期)に行っても良い。2回目は本葉第5葉期に第1葉節が隠れる程度に行う。2回目の中耕・培土は時期が遅れると茎葉や根を傷つけて生育を停滞させるので遅れないように注意し、遅れた場合は雑草が繁茂していなければ、省略するほうが良い。</p> <div data-bbox="608 1128 1278 1630" data-label="Image"> </div> <p>写真2 2回の中耕・培土</p>